

平成20年7月1日

(第66号)

鵜戸

暑中お見舞い申し上げます

鵜戸神宮ホームページ

<http://www.btvn.ne.jp/~udojingu/>

発行者兼編集者

鵜戸神宮社務所

宮司就任挨拶



宮司 本部雅裕

この度ご神縁があり、第十一代宮司として着任致しました。本部長と申します。先代杉田宮司同様何卒宜しくお願ひ申し上げます。

実は私、鵜戸神宮は二度目のご奉仕でございます。昭和四十九年、國學院大学を卒業後直ちにこちらにお世話になりました。五年間勤めさせていただきました。当時は第八代長友安美宮司の時代で、宮司は威厳のある明治の神道人でありました。

時は移り、三十年後の今、宮司の椅子で私が宮司就任の挨拶文を書いてみようとは、黄泉の国の長友大人もまさか信

じてもらへないのではなからうかと、心配でならないのでござぬます。昭和四十、五十年代の鵜戸神宮は、いはゆる「新婚旅行のメッカ」として、また国内有数の観光地として毎日多くの「観光客」が訪れておりました。それはそれとして大変有難いことでありましたが、時の長友宮司は、鵜戸山の信仰が時代の流れに押し流されることを憂ひ、「鵜戸神宮は観光だけではない。歴史的にも『鵜戸さん信仰』の深いお宮である」と、神社本庁の機関紙「月刊若木」に掲載されております。私は今この文章を読み返し

ては、今一度「鵜戸さん信仰」の再確立を計らなければと考へています。それは、当神宮はご祭神がお生まれになり、お育ちになられた靈氣漂ふ聖地であることから、安産・子育ての信仰深いものがあるからです。そのほか大漁満足・航海安全や、厄祓ひを祈る信仰、剣祖を生んだ剣法発祥の地、さらには琵琶発祥の地としての音楽、芸能の信仰等実にさまざま信仰があります。



これら永い歴史に根ざした、皆様方から寄せられる敬虔な祈りを大事にして行かなければなりません。特に、ご祭神は神武天皇さまの御父君でございます。向後、なほ一層引き締め、只管に皇室のご安泰を祈り上げる神社の宮司として、一意専心ご奉仕致したいと大任の重さを改めて実感してをります。大正二年、徳富蘆花は鵜戸神宮に参詣し、「東に向ふて光の中にしばらく無念夢想に立たずみ」

千早ふる

神代の昔さながらに

鵜戸の窓に

朝日さすなり

と詠んでおります。

職員一同力を併せ、今も昔も変はらぬ、神代の昔さながらの「鵜戸山」であるやう勤めてまいります。

例 祭 齋 行

二月一日、午前十時三十分より例祭を齋行。波の響きが厳儀を引き立てる中、祭典に先立ち柳生新影流兵法長岡鎮廣氏他により剣舞が奉納された。約百八十名参列の中、舞



献上詞使幣献

修 祓

参 進

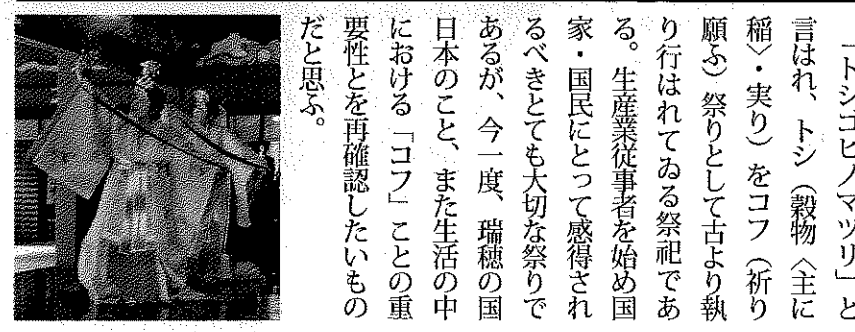
献上詞祝司宮

舞樂

「蘭陵王」

祈 年 祭

二月十七日、十時三十分より祈年祭を齋行。祭典では今年の豊作を祈る祝詞が奏上され、巫女により「浦安の舞」が奏舞された。「トシゴヒノマツリ」と



言はれ、トシ(穀物)主に稲(実り)をコフ(祈り願ふ)祭りとして古より執り行はれてゐる祭祀である。生産業従事者を始め国家・国民にとって感得されるべきとても大切な祭りであるが、今一度、瑞穂の国日本のごこと、また生活の中における「コフ」ことの重要性とを再確認したいもの

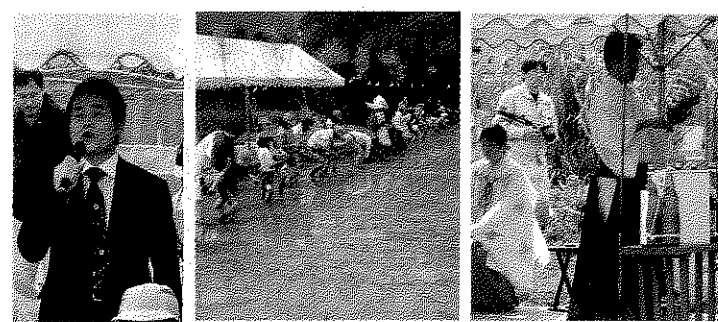
御 田 植 祭

三月十五日、御田植祭を齋行。祭典を迎へるにあたり、二月に播種祭(種蒔き)を行ひ、三月上旬には御神田清祓祭を齋行。早苗も願調に生長し無事にこの日を迎へる事となった。



J Aはまゆうの女性職員が早乙女姿で奉仕し、田植祭の儀に華を添へた。また、地元小学校の児童や先生方にも奉仕頂き、約

ニアールの神田にコシヒカリ・餅米が丁寧に賑やかに植ゑられた。さらにこの日来宮された声楽家で音楽事務所社長の勝田友彰氏が特別参列し、田植祭の約四十分間、透き通る心地よい歌声を披露した。今年も七月中旬に抜穂祭(稲刈り)を予定してゐる。



シヤンシヤン馬道中唄全国大会 シヤンシヤン馬道中再現

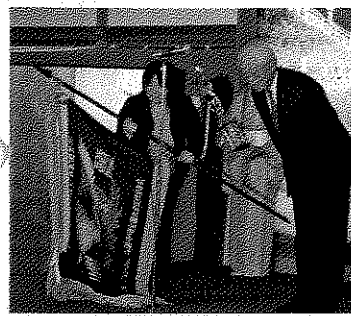
民謡「シヤンシヤン馬道中唄」の全国大会決勝戦が、三月三十日当神宮儀式殿にて行われた。

大会は今年で二十二回目となり、前日に行われた約四〇〇名参加の予選会で、年齢ごとに勝ち抜いた一八四名が会場を埋め、熟練された歌声で終日盛り上がった。

境内では、明治中頃まで風習として行はれてゐた「シヤンシヤン馬道中」の鷓戸さん参りを再現。あいにくの雨となったが、県内外からの応募で選ばれた一



組の新婦夫婦が参加。当時の装ひをした二人は御本殿にて正式参拜の後、花婿が鈴飾りを着けた馬の手綱を取って花嫁が乗馬。大勢の参拜者から暖かな拍手が送られた。



皆様ご存知の、作曲家

で音楽活動・演出など幅広く活躍中の服部克久氏。当神宮とは、深いご縁があり、今回鷓戸神宮への思ひやエピソードをお寄せ頂きましたのでここに紹介させていただきます。

なにごとの

おわしますか

知らねども

服部克久

はっとりかつひさ

「なにごとの、おわしますかには知らねども」という言葉が有る、私の好きな言葉だ。商売柄日本中あちらこちら旅をすることが多いのだが、行った先に由緒ある神社や遺跡などがある

と、どんなにタイトなスケジュールでもちよつと時間を割くようにしている。鷓戸神宮に初めて伺ったのはかれこれ十五年くらい前になるだろうか、宮崎市内でコンサートの後地元の方に連れて行っていただいたのが、最初の貴宮との出逢いで有った。

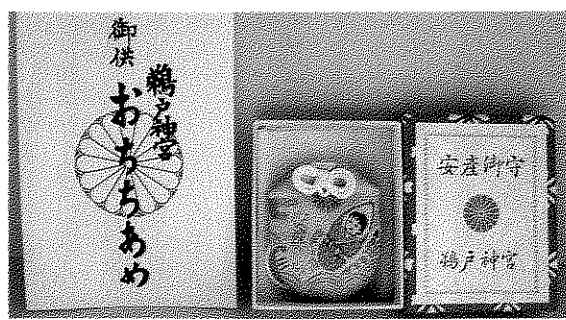
絶え間なく打ち寄せる太平洋の荒波を背にして神殿に顔すくともまさに「なにごとのおわしますか知らねども」で、思わず両手を合わせてしまったのを覚えている。それからはずつかり鷓戸神宮のファン(?)になつてしまい、機会をみつければお参りをさせて頂いている。

十年程前も、長男の嫁が出産を控えていたこともあつて安産のお守り札を頂いてきた。御陰さまで今年九歳になるが服部家の四代目として毎日ヴァイオリンのレッスンに明け暮れている。

親(祖父)の鼻目目で見せてもらうと、音楽の才能もあるがなかなかの美人ちゃんでも有る。これもみな鷓戸神宮のご利益というべきか。

ちようどその頃、高千穂で三年程音楽祭のプロデューサーをお引き受けしたことが有った。

相変わらず忙しいリハールの合間を縫って天岩戸神社と天安河原にお参りをした。川のほとりにポツ



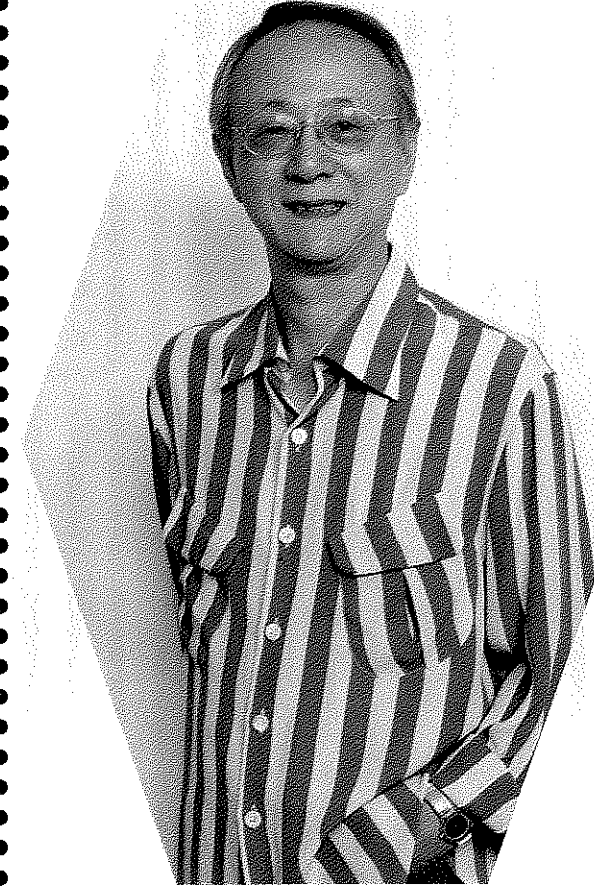
カリと空いた洞窟に小さな社、あたりは静寂につつまれて聞こえるのは川音と鳥の声のみで誠に聖地と言ふに相応しい場所だ。同行の岩崎宏美さんも何か感じるところがあつたみたいで、その日のコンサートは中々の出来映えだった。大体こういう仕事に携わっている人たちは一般の方たちよりそういう感性を強く持っている人が多いように思う。

自分自身にしても神社仏閣や野外等でコンサートを行うとなにか不思議な力に動かされているなど感じることもある。

もうそろそろ二十年になるるか、当時広島博覧会のプロデューサーをやっていた僕のところ世界的に著名な指揮者のロリンマゼールから連絡が有った。広島市の爆心地跡の公園で自作の鎮魂曲を演奏したいと

のことで、残念ながら市側の事情で実現はしなかったが音楽家にとっては何かをかんじる場所ではパフォーマンスをしたという気持ちは良く理解できる。もともと芸能というのは神事から発生したものと聞いているからこれはごく自然のメンタリティーと言えよう。

話は変わるが宮崎市主催の岩切章太郎賞という顕彰事業が有る。宮崎交通の創



(服部克久氏)

写真提供 株式会社 音楽畑出版

始者であつた岩切章太郎氏の観光哲学を継承している観光事業者と自治体を顕彰するもので、今年で二十回を数え、その二十回目をもって今年終了するのだが、最後ということも有つて当年は宮崎県の日南市が選ばれた。その表彰式の前夜祭のパーティーの席で本部宮司にお目にかかったのがきっかけで今この原稿を書いている次第で有る。鷓戸神宮で安産のお守りを頂いたこともあつて、こちらから強引に名乗りをあげて自己紹介をし、合わせて安産のお札を申し上げた。翌日の表彰式は前夜の大雨もすつかりあがつて、晴天に恵まれ滞りなく終了した。本来なら鷓戸神宮にお参りして帰るのだが、今回は一寸所用があつて京都に行かなければいけなかつたので、残念ながら割愛せざるを得なかつた。宮崎空港午後三時発のボンバルディ

ア機に乗り込む。先だつて前輪に故障の有った機種なので少々緊張したが誠に快適なフライトで何事もなく一時間程で大阪は伊丹空港に到着。タクシーで京都御所前のブライトンホテルにチェックインしたのはまだ六時前だった。考えてみれば天孫降臨の地日向から神武天皇御東征の道筋そのままに京都御所までわずか三時間で着いてしまったことになる。往時のご苦労を偲ぶ間もない小旅行であつた。都城の文化会館の館長をお引き受けしたこともあつてこれからは何かと宮崎を訪れる機会が増えると思う。今度はゆつくり参拝して一杯気を頂きたいと思つている今日のごろであります。

ひとこと
先生には、執筆いただいた後の五月二十九日、来県したその足で早速ご参拝いただいた。

いさみ太鼓奉納

五月五日午前十時、地元小学生を中心に参加児童三十八名が、ハッピーに鉢巻姿で「いさみ太鼓」を奉納。この行事は、昭和五十一年から毎年「こどもの日」に行はれ、当神宮眼下の荒磯に打ちつけ砕ける波の様子を、大小の太鼓と横笛・鈴で表現。これに合はせて獅子力が強く優雅に舞ひ踊った。



辞令

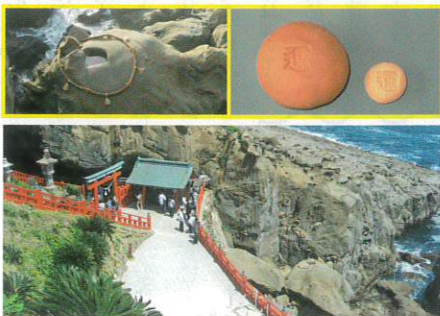
鵜戸神宮宮司 杉田 秀清
宮崎神宮宮司に任ずる
神社本庁 (三月一日)

宮崎県神社庁参事

本部 雅裕

鵜戸神宮宮司に任ずる
神社本庁 (三月一日)

巨大運玉出現!!



四月のある朝、衛士がいつものやうに亀石の清掃をするため岩場に降り、何気なく水の張ったくぼみを見ると、昨日参拝者が見事投げ入れた運玉の中に一際目立つ物体が入ってゐる。恐る恐る手に取ると、なんとそれは巨大運玉だった。その話を聞き、早速通常授与してゐる運玉と比較してみた。(写真参照) ふく

で、運玉を調製する関係者が作製し、持ち込んで投げたものと推察した。それにしても四十センチ四方のくぼみに、十メートル以上はなれた場所からこの重さの運玉を投げ、見事に入つてゐることに驚きも倍増。玉にこめた願ひはいつたか何だったのか? (高橋)

編集後記

○表紙の写真は、ご祭神の鎮まります洞内へ導く階段からの撮影です。壮大な風景の中、正面下の手水舎を見おろし階段をおりる時の引きよせられさうな感覚がお伝へできましたら幸いです。

○本号発行に際し、服部克久様にはご多忙中にも拘はりませず玉稿を賜り、誠にありがとうございました。紙面をもちまして厚く御礼申し上げます。

○本号より歴史かなづかひを使用します。ご参拝お待ちをります。